

診療所・調剤薬局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

なかばやしいせき
中林遺跡

2011年3月

高松市教育委員会

宮部 和徳

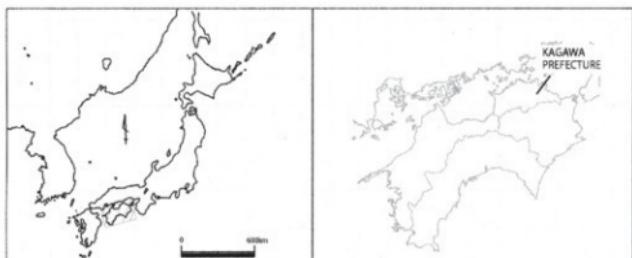
千金丹メディカルワーク株式会社

例　　言

- 1 本書は、診療所・調剤薬局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、中林遺跡の報告を収録した。
- 2 発掘調査地及び調査期間、調査面積は、次のとおりである。

調　　査　　地	高松市林町字中林478番1
調査期間	平成22年6月21日～6月26日
調査面積	192m ²
- 3 発掘調査・整理作業は高松市教育委員会が担当し、その費用は宮部和徳と千金丹メディカルワーク株式会社が全額負担した。
- 4 現地調査は、高松市教育委員会教育部文化財課文化財専門員 高上拓・船築紀子が担当した。
- 5 整理作業は高上・船築が担当した。
- 6 本報告書の執筆・編集は高上が担当した。
- 7 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々から御教示及び御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。

土地家屋調査士 市原 忠和
- 8 本書の挿図として、高松市都市計画図2千5百分の1を一部改変して使用した。
- 9 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。なお、これらの数値は世界測地系第Ⅳ系にしたがった。
- 10 出土遺物の実測図は、土器やその他土製品等は1/4、石器2/3、遺構の縮尺については図面ごとに示している。また、石器実測図中で現代の折損は黒で塗り潰している。
- 11 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。



目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過		第Ⅳ章 調査の成果	
第1節 調査の経緯.....	1	第1節 弥生時代.....	8
第2節 周辺における既往の調査.....	1	第2節 古代～中世.....	10
第3節 調査日誌.....	2	第V章 まとめ	
第4節 整理作業の体制と日程.....	3	第1節 中林遺跡の時期的変遷	12
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境			
第1節 地理的環境.....	3		
第2節 歴史的環境.....	3		
第Ⅲ章 調査の概要			
第1節 試掘調査の結果.....	5		
第2節 調査の方法.....	6		
第3節 基本層序.....	6		

挿 図 目 次

Fig. 1 中林遺跡位置図.....	1	Fig. 6 造構配置図・土層断面図.....	7
Fig. 2 中林遺跡と周辺の遺跡分布図.....	2	Fig. 7 SD 1・2・4 平断面図.....	8
Fig. 3 高松平野の地形図と遺跡位置図.....	4	Fig. 8 SD 5・7 平断面図.....	9
Fig. 4 試掘調査出土遺物.....	5	Fig. 9 SK1, SD8・9, SP1～3 平断面図.....	10
Fig. 5 調査地配置図.....	5	Fig. 10 SP4～9 平断面図	11

挿 表 目 次

Tab. 1 整理作業工程表.....	3	Tab. 2 基準点座標一覧表.....	6
---------------------	---	----------------------	---

図 版 目 次

PL. 1 1. 東側擁壁設置部分北半完掘状況 (南から)		PL. 2 1. 北側浄化槽設置部分東壁断面 (西から)	
2. 東側擁壁設置部分南半完掘状況 (北から)		2. 南側浄化槽設置部分東壁断面 (西から)	
3. 西側擁壁設置部分南半完掘状況 (北から)		3. 診療所基礎設置部分東壁断面① (西から)	
4. 西側擁壁設置部分北半完掘状況 (南から)		4. 診療所基礎設置部分東壁断面② (西から)	
5. 南側浄化槽設置部分完掘状況 (南から)		5. SK 1 完掘状況 (南から)	
6. 北側浄化槽設置部分完掘状況 (南から)		6. SD 1 完掘状況 (北から)	
		7. SD 4 完掘状況 (北から)	
		8. SD 4 断面 (西から)	

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本調査地は高松市林町字中林 478 番 1 にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地「上林遺跡」の西側に隣接する。当地において診療所・調剤薬局の建設が計画され、平成 22 年 4 月 9 日付けで地権者より確認調査依頼が高松市教育委員会（以下、本市教委）に提出された。本市教委では、この依頼を受けて 4 月 16 日に試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財の包蔵状況を確認したため、調査内容を県教委に報告した。その結果、当該地は県教委により 4 月 28 日付けで新規の埋蔵文化財包蔵地として認定され、小字名から「中林遺跡」と命名された。その後、4 月 28 日付けで事業者から本市教委を経由して県教委に埋蔵文化財発掘の届出が提出され、5 月 18 日付けで「発掘調査」の行政指導を受けた。この指導を受けて事業者と再度協議したところ、発掘調査を行い、記録保存の措置を探ることで合意したため、6 月 18 日付けで本市と事業者は埋蔵文化財調査協定書を締結した。本市教委はこの協定に基づき、平成 22 年 6 月 21 日から 26 日にかけて、発掘調査を実施した。本書は、この発掘調査の成果を報告するものである。

第2節 周辺における既往の調査

中林遺跡は現代の行政区画では高松市林町に所在し、地勢的には高松平野中央部のやや東よりも位置する。本遺跡の周辺では、近年、空港跡地整備事業に伴う調査など大規模調査がなされている。また、本調査地の西側に隣接した県道中徳三谷線の建設工事に伴い、香川県教育委員会が上林遺跡の発掘調査を行っている（上林遺跡、Fig.2 - 49）。発掘調査報告書は未刊であるが、参考文献に挙げた概報によると、弥生時代・中世・近世の遺構が確認されている。本調査地でも弥生時代後期と古代～中世にかけての遺構を確認しており、弥生時代後期後半段階に一度遺構形成が断絶され、古代～中世段階に再開されるといった状況が周辺で確認できそうである。詳細な検討は上林遺跡の発掘調査報告書の刊行を待ちたい。なお、Fig. 2 に周辺の遺跡分布図を掲載している。

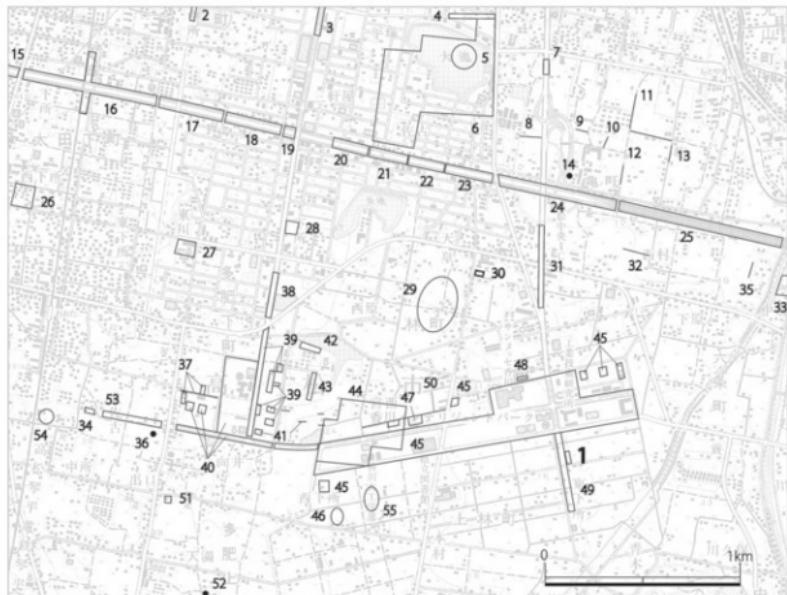
【参考文献】

- 香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 2000 「上林遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報』平成 11 年度
香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 2001 「上林遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』平成 12 年度



Fig. 1 中林遺跡位置図（縮尺 = 1 /5,000）

香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 2002 「上林遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』平成 13 年度



1. 中林遺跡
2. キモンドー遺跡
3. 松籠下所遺跡
4. 上西原遺跡
5. 大池遺跡
6. 弘福寺領田園北地区比定地
7. 木太町九区遺跡
8. 林浴遺跡
9. 林下所遺跡
10. 林下所遺跡
11. 林下所・木太今村遺跡
12. 林下所遺跡
13. 林下所・六条乾遺跡
14. 林下所遺跡
15. 上天神遺跡
16. 太田下・須川遺跡
17. 蛙股遺跡
18. 居石遺跡
19. 井手東II遺跡
20. 井手東I遺跡
21. 沼長池II遺跡
22. 沼長池I遺跡
23. 浴松ノ木遺跡
24. 秋坊城遺跡
25. 六条上所遺跡
26. 太田城跡
27. 汲仏遺跡
28. 多肥下町下所遺跡
29. 天皇西原遺跡
30. 林宗高遺跡
31. 宗高坊城遺跡
32. 六条西村遺跡
33. 六条城跡
34. 多肥北原遺跡
35. 六条上川西遺跡
36. お茶荒神
37. 松林遺跡
38. 回原遺跡
39. 日暮・松林遺跡
40. 多肥松林遺跡
41. 多肥宮尻遺跡
42. 池の内遺跡II
43. 池の内遺跡I
44. 弘福寺領田園南地区比定地
45. 空港跡地遺跡
46. 烟遺跡
47. 一角遺跡
48. 公務員宿舎遺跡
49. 上林遺跡
50. 宮西・一角遺跡
51. 高木城跡
52. 天満宮古墳
53. 多肥平塚遺跡
54. 多肥廢寺
55. 拝師庵寺

Fig. 2 中林遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺 = 1 / 25,000）

第3節 調査日誌

- 6月21日 重機掘削開始。同日中に重機掘削を完了する。
- 6月22日 調査対象地の北半から遺構精査開始。順次掘削および記録作業を行う。
- 6月25日 全調査対象地の記録作業を完了。
- 6月26日 座標及び図面の最終確認。調査完了。

第4節 整理作業の体制と日程

整理作業は6月28日に開始し、2月29日に終了した。進捗状況は下表のとおりである。
Tab. 1 整理作業工程表

	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
洗浄											
接合・復元		■									
遺物実測		■									
遺構図レイアウト			■								
遺構図トレース			■								
遺物レイアウト				■	■						
遺物トレース					■						
観察表作成					■						
遺物写真撮影						■					
写真レイアウト						■					
原稿執筆					■	■	■	■	■	■	■
編集					■	■	■	■	■	■	■

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の県都であり、面積約375km²の市域に約42万人の人々が暮らす、四国地方有数の都市である。平成の大合併により近隣の庵治町・牟礼町・塩江町・香川町・香南町・国分寺町と合併したこと、阿讃山脈から瀬戸内海にまで及ぶ広大な市域を有することとなった。これにより北は備讃瀬戸で岡山県と、南は阿讃山脈で徳島県とそれぞれ境を接している。

本遺跡の立地する高松平野は、平野を南北に貫く複数の河川の堆積作用により形成されたものである。平野には本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川などの河川が流れが、中でも香東川の堆積作用が最も強く、春日川の西側付近まで香東川の堆積作用による平野が広がる。また、現在は埋没しているが、平野中央部の林町から木太町にかけての範囲で複数の旧河道が存在したことが知られており、河川に伴う後背湿地や自然堤防など、現在に比べてはるかに起伏に富んだ地形を形成していたことが判明している。今回の発掘調査地は狭い範囲であるが、土壤の堆積状況から、長期間に渡って比較的平坦な旧地形が想定できる。このため、弥生時代以降、比較的安定した地盤の上に遺跡が形成されたものと考えられる。

第2節 歴史的環境

旧石器時代～縄文時代 高松平野における旧石器時代の生活の痕跡は、久米池南遺跡、諏訪神社遺跡、雨山南遺跡、中間西井坪遺跡、香西南西打遺跡、西打遺跡などで確認されているが、本遺跡の位置する平野中央部付近ではまだ検出例がない。旧石器時代後期にあたるウルム氷期には、備讃瀬戸が完全に陸化しており、多くの湖沼が存在し大小の河川が流れる盆地であったことが指摘されている（長谷川・齊藤1989）。平野の大部分の堆積はこの後であり、旧石器時代の遺跡が検出されるのは平野縁辺部の丘陵上に集中する。

縄文時代の明瞭な遺構や遺物は極めて少ない。平野部での遺跡の増加が顕著に認められるのは晩期以降である。居石遺跡、松林遺跡、川岡遺跡、浴・長池遺跡、上天神遺跡、前田東・中村遺跡、林坊城遺跡などで晩期の遺構・遺物が検出されている。

弥生時代 縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて、平野部での集落の形成が顕著に認められる。本遺跡周辺でも、浴・長池遺跡、井手東II遺跡、宗高坊城遺跡など、縄文晩期から継続するこれらの遺跡では、小規模な水田跡など農耕に関する遺構が検出されている。また天満・宮西遺跡、汲仏遺跡では1重～2重の環濠が巡る環濠集落が形成されたことが確認されている。この後、前期末～中期前半に継続する集落は少ない。浴・長池遺跡で前期から中期前葉まで連続した居住が認められる例を除けば、新たに生活の痕跡が認められるのは中期中葉以降である。この時期には段丘化によって平野部の堆積が一気に進行することが指摘されており、こうした自然環境の変動も一因であったと考えられる。中期後半～後期前半にかけては、太田下・須川遺跡、上天神遺跡などで集落跡が確認される。後期後半には、凹原遺跡、空港跡地遺跡、日暮・松林遺跡、一角遺跡、天満・宮西遺跡、宗高坊城遺跡などで再度集落が形成される。本遺跡でも後期後半の集落が確認されている。周辺の遺跡のうち一部はその後、終末期から古墳時代前期前半まで継続する様子が認められる。以上各時期の遺跡の消長を概観したが、弥生時代の高松平野では集落の形成と解体が繰り返し認められ、長期間継続する集落が少ないという特徴が指摘されている。本遺跡でも、後期後半で一度断絶が認められ、古代に再開されるまでの間、生活の痕跡は認められなかった。

古墳時代 集落域に関する資料は多くないが、前述のように古墳時代前期前半では弥生時代終末期から継続する遺跡が認められる。本遺跡の周辺では空港跡地遺跡、六条・上所遺跡、浴・松ノ木遺跡などで集落跡が確認されている。集落域の状況が明らかでない一方、平野縁辺部の丘陵上には数多くの古墳が築造される。高松平野中央部付近では、石清尾山山塊中に前期から中期までの累代的な墓域が形成される石清尾山古墳群が存在するほか、平野の東部では高松市茶臼山古墳、南部では船岡山古墳などの有力な古墳が築造される。前期古墳の盛行とは対照的に、今岡古墳などを除いて中期古墳の例は極めて少ない。後期から終末期にかけては、丘陵上に数多くの群集墳が築造され、石清尾山山塊を中心に淨願寺山古墳群、南山浦古墳群などが調査されている。

古代 古代の高松平野は大きく西部の香川郡、東部の山田郡に分割され、平野部のほぼ全面に南北線が東に約9～11°傾く条里地割が分布する。本遺跡周辺では特に弘福寺領讚岐国山田郡田団比定地における学際的な調査がなされ、当地の土地利用の変遷や条里地割について重要な成果が得られた。この条里地割に沿った溝や建物跡が松縄・下所遺跡、空港跡地遺跡、汲仏遺跡などで検出されている。高松平野では古墳時代後期～古代の前半にかけて、それまで集落域の営まれていた微高地が埋没したとされ、それに伴い集落の断絶と形成が認められる。



Fig. 3 高松平野の地形図と遺構位置図

中・近世 中世高松の武士としては香西氏・十河氏・由佐氏等が知られ、香西氏の平地の居館である佐料城、詰め城である勝賀城などが知られる。本遺跡周辺ではキモノードー遺跡で佐藤城の堀が検出されている。居住域としては、空港跡地遺跡で古代～中世の集落の変遷が詳細に検討され、当該期の高松平野を考える上で重要な見知りが得られている。本遺跡に隣接する上林遺跡では近世の遺構・遺物が確認されているが、本遺跡では明確な近世段階の遺構を確認することができなかった。

天正 16 (1588) 年、豊臣秀吉の家臣、生駒親正により高松城が築城され、城下町が整備される。その後、生駒騒動により生駒家が出羽国に転封されると、寛永 19 (1642) 年、松平頼重が東譜岐 12 万石を拝領し、高松城主として入封した。松平家は徳川將軍家の親藩として代々藩主をつとめ、明治維新を迎える。

(主要参考文献)

- 長谷川修一・齊藤実 1989 「讃岐平野の生いた
ち－第一瀬戸内累層群以降を中心として－」 渡邊誠 2007 「地理的・歴史的環境」「日暮・
松林遺跡』 共同住宅建設に伴う埋蔵文化財
『アーバンクボタ』 28 株式会社クボタ 発掘調査報告書 高松市教育委員会

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 試掘調査の結果

Fig. 5 の中央に「試掘トレンチ」として示した範囲を対象として、試掘調査を行った。その結果、埋蔵文化財の包蔵状況が認められた。試掘調査の成果概略を以下に記す。試掘調査では、Fig. 6～7 層に対応する土層を基盤層とした溝およびビットを検出した。溝の検出位置と延伸方向から、後述する SD 1 の一部であった可能性が高い。遺物であるが、遺物包含層 (Fig. 6～3・4 層に対応) からの出土を確認している。1 はサヌカイト製凹基式石鋏の未製品である。重量 3.1 g を測る。切先と側縁部、基部のそれぞれが欠損している。2 は土師器供膳具の口縁部である。細片であり器種の特定は困難である。口縁端部は直線的におさめ、復元口径 12.4 cm を測る。全体的に器壁が磨耗しており、調整等の詳細は不明である。

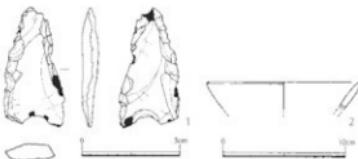


Fig. 4 試掘調査出土遺物
(石器: 2/3, 土師器 1/4)

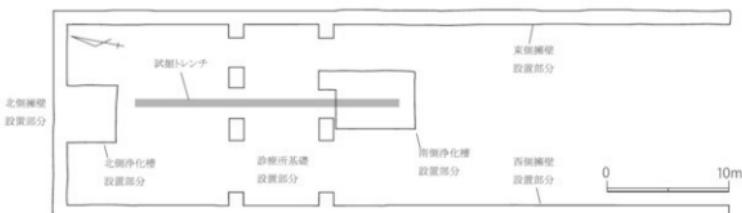


Fig. 5 調査地配置図 (縮尺 = 1/400)

第2節 調査の方法

試掘調査で埋蔵文化財の包蔵状況を確認した後、事業者と協議を行い、開発工事によって埋蔵文化財に影響を及ぼす深度まで掘削する範囲について発掘調査を実施した。具体的には、調査地の東・西・北側の擁壁設置部分と、南北の診療所基礎設置部分、浄化槽設置部分である（Fig. 5）。

掘削は重機による造構の上面検出ののち、人力による造構埋土の掘削を基本とした。記録に際しては調査対象地の東側に2点の基準点を設け（A1・A2）、実測を行った。現地での造構平面図及び断面図は縮尺1/20で作図した。写真は35mmフィルムカメラを使用し、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムで記録した。また、補助的にコンパクトデジタルカメラを用いて撮影を行った。以上の記録資料ならびに出土遺物は本市教育委員会で保管している。

Tab. 2 基準点座標一覧表

	A1	A2
X	143461.309	143508.968
Y	52910.392	52901.290

（数値は世界測地系第IV系による）

第3節 基本層序（Fig. 6）

北側浄化槽設置部分・診療所基礎設置部分・南側浄化槽設置部分の各東壁断面図と、後述するSD5断面図（Fig. 8）を参照しながら当地の基本層序を概観しておこう。

本調査対象地では、表土を含むほぼ全ての堆積層が基本的に水平堆積していることが確認できる。Fig. 6-1・2層は現表土と床土である。試掘調査時に近世以降の陶磁器を採集している。3・4層は灰黄褐色系の微粒砂からなっており、土師器片・須恵器片を含む遺物包含層である。3層上面の標高が調査対象地北端で15.14m、南端で15.28mを測り、ほぼ水平な堆積状況をみるが、北側に向かってやや傾斜し下がる状況が確認できる。こうした状況は、南に阿讃山脈が位置し、北に向かって徐々に標高が低くなるという、高松平野の地形と矛盾しない。4層上面の標高は調査地北端で15.06m、南端で15.12mを測り、3層と同様の状況である。6層は造構埋土である。全体的に出土遺物に乏しく、詳細な時期比定は困難であるが、概ね弥生時代に属する造構の埋土は黒色系のシルトであり、古代～中世段階の造構埋土は黄灰色系のシルトという傾向が本調査地では確認できた。7層は褐灰色粘土である。非常に締まりの強く均質な土質であり、搅乱等を受けていないことから、地山であると判断した。今回の調査で検出した造構は、基本的に全て7層を掘り込んで形成されていることから、7層が造構の基盤層である。弥生時代後期と古代～中世の造構の基盤層が同一である理由について、古代～中世の造構基盤層が後世に削平された可能性と、弥生時代後期以降、古代まで堆積作用があまり働かない地点であった可能性の2者が想定される。7層の直上に堆積する5層の堆積状況を見ると、非常に薄く、各所でランダムに途切れている状況が確認できることから、前者の可能性が高いと考えられるが、断定しろる状況は確認できなかった。7層の下層の堆積状況であるが、試掘調査時に試掘トレーンチの中央（診療所基礎設置部分付近）で断割り調査を行ったところ、7層上面から0.7m以上の深度まで同一層の堆積が確認された。一方、SD5の完掘時に確認したところ、東側擁壁設置部分の南端付近では、7層の上面から約0.4mの深度で、黄灰色中～粗粒砂からなる砂層を確認している。以上から、7層の下層には砂層が堆積しており、この砂層も南から北にかけて傾斜が下がることを確認している。

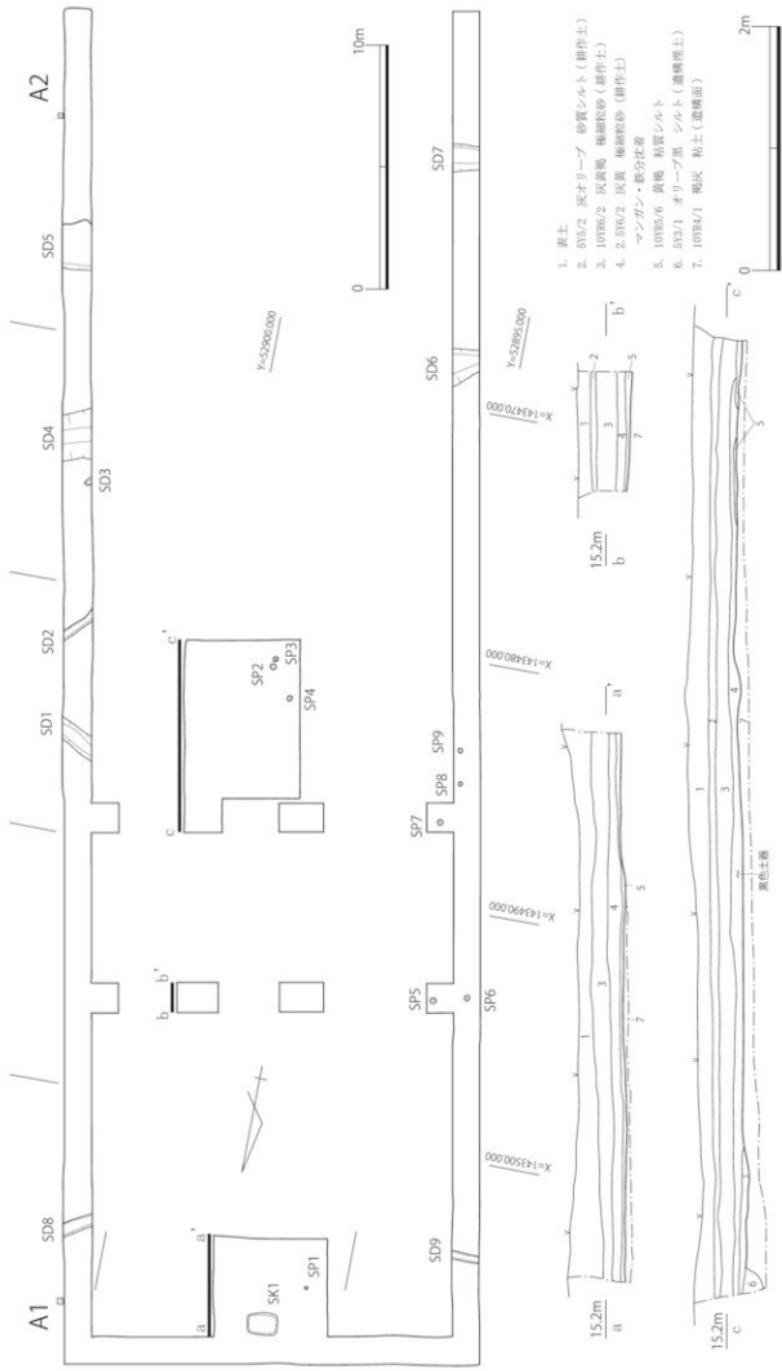


Fig. 6 造配配置図・土層断面図
(配置図: 1/200, 断面図 1/40)

第IV章 調査の成果

第1節 弥生時代

弥生時代の遺構として、調査対象地中央から南側にかけて複数条の溝跡を検出した。

Fig. 6 - 7 層を基盤層として掘り込まれており、埋土は黒褐色系統の粘土へシルトを中心としている。位置関係と溝の延伸方向、さらに断面形状と堆積状況から判断して、SD 4 と SD 6、SD 5 と SD 7 はそれぞれ一連の溝である可能性が高い。また、SD 2 ~ 7 は、平面の延伸方向が座標方位に対して概ね北東 - 南西方向に傾く傾向にある。一方、SD 1 は北西 - 南東方向に傾斜している。以下で各遺構の詳細を記述する。

SD 1 東側擁壁設置部分の中央付近で検出した溝跡である。北西 - 南東方向に直線的に延び、東西両端は調査区外へ続く。最大幅約 0.8 m、最大深度は約 0.1 m を測り、埋土は黒褐色シルトである。出土遺物としては弥生土器片がある。3 は弥生土器壺の口頭部である。外面にハケ目、内面には指頭圧痕が観察できる。器壁は薄い。その他細片であり図化できなかったが、器壁が極めて薄く、角閃石細粒を稠密に含む弥生土器片を約 8 点検出している。細片は 3 と同一個体である可能性も考えられる。詳細な時期比定は困難であるが、3 から弥生時代後期の時期が考えられる。

SD 2 東側擁壁設置部分の中央付近で、SD 1 の南側に位置する溝跡である。北東 - 南西方向に直線的に延び、東西両端は調査区外へ延びる。最大幅は約 0.4 m とやや狭く、深度も 0.1m と浅い。埋土は黒褐色シルトである。遺物は出土しておらず、時期比定は困難であるが、埋土と遺構の基盤層が SD 1 や SD 4 と同一層であることから、ほぼ同時期に形成され埋没した遺構である可能性が高いと考えられる。

SD 4 - SD 6 東側擁壁設置部分と西側擁壁設置部分の 2 箇所で検出した溝跡である。

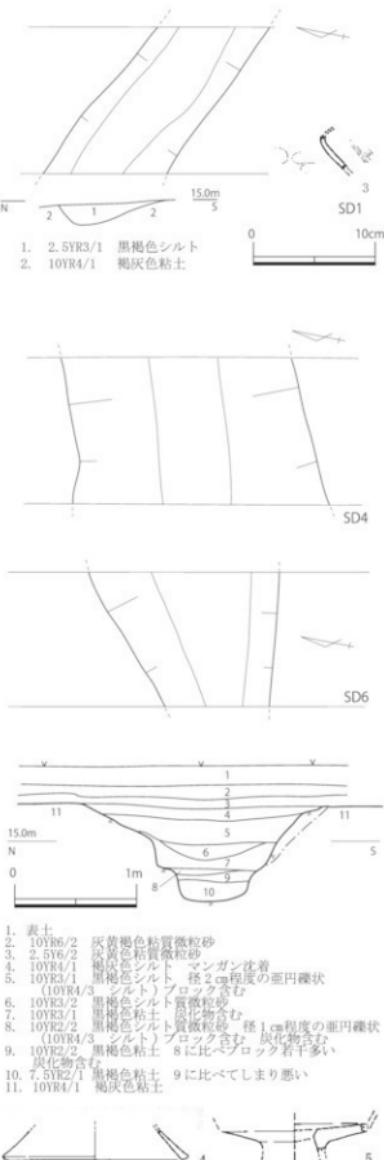


Fig. 7 SD 1 - 4 - 6

(遺構 : 1/40, 遺物 1/4)

やや距離があり、接続関係は明瞭でないものの、平面・断面形状と堆積層の共通性から、同一の溝跡であると判断した。それぞれ東西両端は調査区外へ直線的に延びる。最大幅は約2.0m、最大深度は約0.8mを測る規模の大きな溝である。埋土は主に黒褐色の粘土から砂混じりシルトが互層を成しレンズ状に堆積している。このことから、比較的長期に渡る継続的な溝の使用と埋没が想定できる。なお、浚渫などに伴う掘り返しの痕跡は認められなかつた。出土遺物としては弥生土器片が認められる。4は弥生土器高杯の脚部である。器壁は薄く、全体的に磨耗が著しい。底部の端部は肥厚せず、四角くおさめる形状を呈す。角閃石の細粒を比較的稠密に含んでおり、いわゆる香東川下流域産土器であると考えられる。5は弥生土器高杯の杯部である。胎土や焼成から、4と同一個体である可能性が考えられる。その他細片のため図化できなかつたが、弥生土器広口壺と高杯の口縁部の可能性が考えられる破片を含む弥生土器片が約30点出土している。高杯の形状その他から、SD4の埋没した時期は弥生時代後期後半以降であると考えられる。

SD5-SD7 東側擁壁設置部分と西側擁壁設置部分の2箇所で検出した溝跡で、SD4-SD6の南側に位置する。SD4-SD6にはほぼ平行し、最大幅は約1.8m、最大深度は約0.4mを測る。断面形状は逆台形に近い形状を呈す。埋土は黒色シルト～粘土である。6は弥生土器底部である。平底の一部であり、底部と体部の間の屈曲は明瞭である。その他細片であり図化できなかつたが、土師質の土器細片を5点検出している。遺物から詳細な時期を比定することは困難であるが、埋土と基盤層の共通性ならびに平面形の位置関係から、SD4とはほぼ同時期の遺構である可能性が高い。

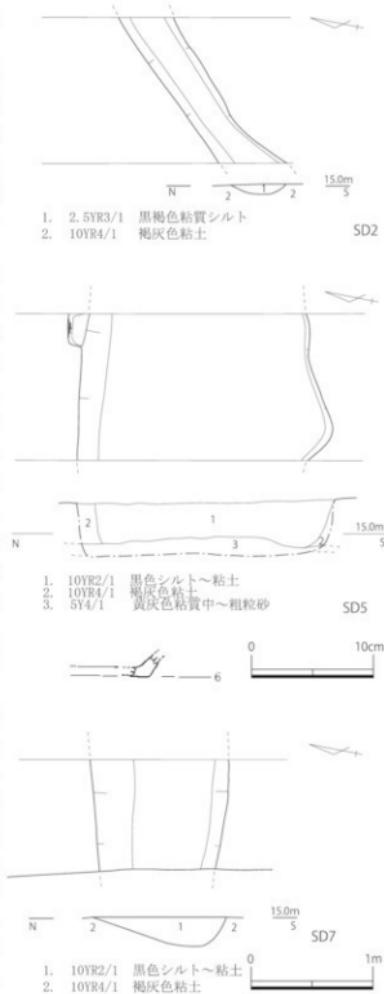


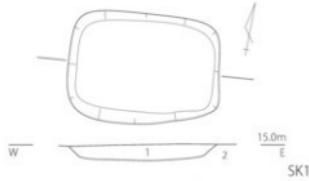
Fig. 8 SD 2・5・7 平断面図
(遺構: 1/40, 遺物 1/4)

第2節 古代～中世

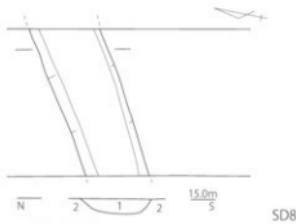
古代～中世にかけての遺構は調査対象地の北半部で、溝、土坑、ピットを検出している。いずれも共通しているのはFig. 6～7層を基盤層として掘削しており、灰白系のシルト層が埋土となっていることである。なお、検出したピットに関してはある程度集中しているものの、検出範囲が限られており、建物等の平面プランを復元することはできなかつた。記述が煩雑になるのを防ぐため、こうしたピットについては遺物の出土状況など特筆すべき事柄に絞って報告を行うこととする。出土遺物に関しては、いずれの遺構からも細片が少量出土したのみであり、検討に耐えうるもののがほとんどない状況である。また、かろうじて図化できた資料には土師器供膳具の口縁部（8～10）や土師器杯（7・11）の底部片などがあるが、器形が復元できるものは皆無であり、詳細な時期比定は困難である。このため、ここでは共通の基盤層と埋土をもつ遺構を古代～中世という大きな時間幅の中で捉えて報告することとした。

S K 1 北側浄化槽設置部分で検出した、平面形状が隅丸長方形を呈する土坑である。長辺約1.2m、短辺約0.9mを測る。断面形状は緩やかなレンズ形を呈し、最大深度は約0.12mを測る。埋土は灰白色シルトが主体で、径2～5cm程度の地山ブロックを多く含む。遺物は土師器体部片が1点出土しているが、磨耗が激しく小片であるため、詳細は不明である。

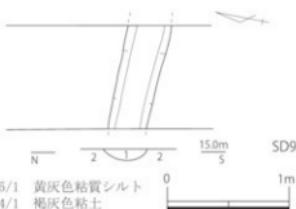
S D 8 東側擁壁設置部分の北側で検出した溝跡である。北東～南西方向に直線的に延び、両端は調査区外へ続く。最大幅は約0.6m、最大深度は0.12mを測り、断面形状は薄いレンズ状を呈す。遺物は出土しておらず、詳細な時期比定は困難である。



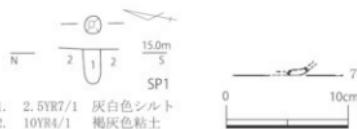
1. 2. 5Y7/1 灰白色シルト φ 5cm程度の豆角礫状地山ブロックとφ 2cm程度の豆円錐状ブロック多量に含む
2. 10YR4/1 暗灰色粘土



1. 2. 5Y5/1 黄灰色粘質シルト
2. 10YR4/1 暗灰色粘土



1. 2. 5Y5/1 黄灰色粘質シルト
2. 10YR4/1 暗灰色粘土



1. 2. 5YR7/1 灰白色シルト
2. 10YR4/1 暗灰色粘土



1. 2. 5Y5/1 黄灰色粘質シルト、炭化物含む
2. 10YR4/1 暗灰色粘土

1. 2. 5YR5/1 黄灰色粘質シルト、炭化物含む
2. 10YR4/1 暗灰色粘土

Fig. 9 SK 1, SD 8・9, SP 1～3 平面図

(遺構：1/40、遺物 1/4)

SD 9 西側擁壁設置部分の北側で検出した溝跡である。東－西方向に直線的に伸び、両端は調査区外へ続く。東側に直線的に延長すると SD 8 に接続する可能性も考えられるが、やや延伸する方向が異なるため、ここでは別々の溝として報告する。最大幅は約 0.4m、最大深度は約 0.1m を測る。埋土は黄灰色粘質シルトである。器種不明土師器の口縁部片が 2 点出土しているが、小片で磨耗が激しいため、図化していない。器厚から判断して、杯ないし椀の口縁部の可能性が考えられる。

SP 1 北側浄化槽設置部分で検出したピットである。褐灰色粘土を基盤層とし、最大深度は約 0.3m を測る。基盤層に対して垂直に掘り込んでおり、埋土は灰白色シルトである。7 は土師器杯の底部である。無高台で体部と底部の屈曲が比較的緩い。その他には器種・部位不明の土師器小片が 1 点出土しているが、いずれも細片であり詳細は不明である。

SP 2 南側浄化槽設置部分で検出したピットである。埋土は黄灰白色粘質シルトである。器種不明の須恵器体部片が 1 点出土しているが、細片であり詳細は不明である。

SP 4 南側浄化槽設置部分で検出したピットである。埋土は黄灰白色粘質シルトである。8・9 は土師器供膳具の口縁部である。残存高が短いため、器種の特定は困難である。端部は肥厚せず直線的におさめる。復元口径は 11.4cm を測る。その他には器種不明の土師器細片が出土しているが、いずれも細片であり詳細は不明である。

SP 6 西側擁壁設置部分と診療所の北西端の基礎設置部分の交点付近で検出したピットである。基盤層は褐灰色粘土であり、埋土は黄灰白色粘質シルトである。10 は土師器供膳具の口縁部である。やや深い器形が想定され、椀の可能性が高い。口縁端部はやや丸く肥厚し、復元口径は 13.2cm を測る。その他には器種不明土師器の小片が出土したが、磨耗が著しく詳細は不明である。

SP 7 診療所の南西端基礎設置部分で検出したピットである。基盤層は褐灰色粘土であり、埋土は灰白色シルトである。11 は土師器杯の底部である。復元底径は 6.1cm を測り、底部と体部の屈曲は緩やかで棱も不明瞭である。

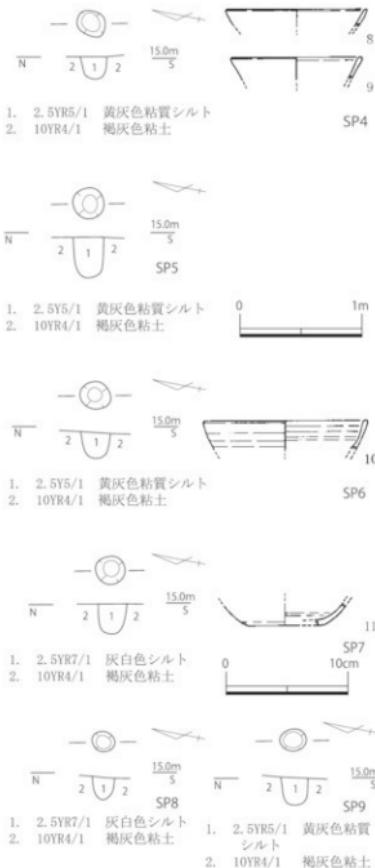


Fig.10 SP 4 ~ 9 平断面図
(構造: 1/40, 遺物 1/4)

第V章　まとめ

第1節　中林遺跡の時期的変遷

中林遺跡では概ね2時期にわたる遺構が検出できた。ここでは調査成果をもとに本遺跡の時期的変遷を確認しておきたい。

弥生時代 遺構に伴う出土遺物がほぼ細片であり、詳細な時期の絞込みが困難な状況であるが、弥生時代後期後半には調査対象地の南側を中心として、概ね東西方向に向かう溝が複数本開削されていたようである。このうち、SD4・SD6・SD5・SD7については調査区の西端と東端で検出されており、さらに調査区外へも伸びる。最大幅はおよそ1.8～2mを測る、規模の大きな溝である。この2本は平行して配置されており、計画的な開削の様子が伺える。ただし、住居跡など、弥生時代の居住の痕跡を直接示す遺構は今回の調査区では検出できなかった。溝跡から出土した遺物をみると、弥生土器の小片が少量含まれるのみであり、なおかつ器壁が著しく磨耗していることからも、居住の中心域からは一定の距離があつたと想定できる。また、遺構の重複関係も認められず、密度も低いことから、長期間連続して使用された地点ではないことが明らかである。

中林遺跡周辺の調査は未だ充分に蓄積されていないが、本調査地西側の県道建設予定地で香川県教育委員会が実施した発掘調査では、弥生時代後期後半の自然河川と河川に接続する溝跡が検出されている。本調査で検出した溝跡とほぼ同時期であることから、同様に導水機能を有した溝である可能性も考えられる。中林遺跡で確認した遺構の性格を確定するには今後の調査の蓄積が必要であるが、少なくとも本調査対象地の西側に同時期の遺跡が広がっていたことが確認されている。

なお、包含層出土遺物であるが、試掘調査時に検出した石錐の未製品（Fig. 4-1）は溝の埋没時期よりも古く位置づけられる可能性もあるため、周辺に弥生時代後期後半以前の遺跡が存在する可能性も考慮しておく必要がある。

古代～中世 遺構としては土坑や溝・ピットを検出した。遺物が出土した遺構が少なく、また検出した遺物も細片であるため詳細な時期比定は困難であるが、埋土と基盤層の共通性からいざれもほぼ同時期の遺構である可能性が高い。古代の高松平野における条里地割はN9～12°E傾くことが指摘されているが（金田1992）、当遺跡で検出した溝跡は座標方位に対して、SD8がN60°E傾き、SD9はほぼ直交する位置関係である。いざれも条里地割の方向性とは一致しておらず、条里との関連は想定できない。

弥生時代以降、高松平野においては長期間継続する集落が認められないことが指摘されていることは第II章で述べたが、本遺跡でも弥生時代後期後半と古代の間に明確な遺跡形成の断絶が認められた。今後はこうした状況がより広域に確認できるかどうか、周辺での調査成果を蓄積し、中林遺跡を含めた周辺地域の時期的変遷を明らかにしたい。

【参考文献】

- 金田草裕 1992「高松平野の条里と弘福寺領讃岐国山田郡田園」「讃岐国弘福寺領の調査」高松市教育委員会
香川県教育委員会・財团法人香川県埋蔵文化財調査センター 2000「上林遺跡」「県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報」
平成11年度
香川県教育委員会・財团法人香川県埋蔵文化財調査センター 2001「上林遺跡」「県道関係埋蔵文化財発掘調査概報」平成12年度
香川県教育委員会・財团法人香川県埋蔵文化財調査センター 2002「上林遺跡」「県道関係埋蔵文化財発掘調査概報」平成13年度
12



1. 東側擁壁設置部分北半完成状況（南から）



2. 東側擁壁設置部分南半完成状況（北から）



3. 西側擁壁設置部分南半完成状況（北から）



4. 東側擁壁設置部分南半完成状況（北から）



5. 南側浄化槽設置部分南半完成状況（南から）



6. 北側浄化槽設置部分南半完成状況（南から）



1. 北側浄化槽設置部分東壁断面（西から）



2. 南側浄化槽設置部分東壁断面（西から）



3. 診療所基礎設置部分東壁断面①（西から）



4. 診療所基礎設置部分東壁断面②（西から）



5. SK 1 完掘状況（南から）



6. SD 1 完掘状況（北から）



7. SD 4 完掘状況（北から）



8. SD 4 断面（西から）

報告書抄録

ふりがな	なかばやしいせき								
書名	中林遺跡								
副書名	診療所・調剤薬局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
卷次									
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	第133集								
編著者名	高上 拓・船築 紀子								
編集機関	高松市教育委員会								
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660								
発行年月日	西暦2011年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因	
なかばやしいせき 中林遺跡	かのばやしきん 香川県 たかまつし 高松市 なかばやしきん 林町	37201	市町村	遺跡番号	34° 56' 02"	134° 05' 18"	2010. 6. 21. ~ 2010. 6. 26.	192 m ²	診療所・ 調剤薬局 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
なかばやしいせき 中林遺跡	集落	弥生時代	溝跡	弥生土器片 石鏃未製品					
		古代～中世	溝跡 ピット 土坑	須恵器片 土師器片					
要約	診療所・調剤薬局建設に伴う発掘調査。高松平野中央部のやや東よりに位置する。弥生時代後期と古代～中世の2時期にわたる遺構を確認した。弥生時代後期の遺構は主に東西方向に延びる溝群である。遺構に遺物がほとんど含まれず、全て小片で磨耗が著しいことから、当時の生活域の中心からはやや離れた場所であった可能性が考えられる。古代～中世の遺構としてはピット群と少数の溝、土坑が挙げられるものの、遺構は希薄である。								

高松市埋蔵文化財調査報告第 133 集

診療所・調剤薬局建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

中林遺跡

平成 23 年 3 月 31 日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番 15 号
発 行 高松市教育委員会
印 刷 有限会社 中央ファイリング